
僕は龍であなたは姫様？

伊藤勇作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は龍であなたは姫様？

【Nコード】

N6083C

【作者名】

伊藤勇作

【あらすじ】

月を見てしまうと龍になる僕、明星翔は幼なじみの宝条伊織が異世界の人であることを告白される。そしてその世界へと一緒に行く事になった僕と伊織だが……。そこは魔法が常識として存在する世界だった。異世界学園ラブコメディ……。のはず（作者談）。【ただ今改正中！本編はしばしまたれよ！ってか待っていてください！すみません！】

プロローグ（前書き）

色々とご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

プロフィール

僕の名前は、明星 翔みよっしょうかける

中学3年。成績は中の上ぐらいだ。

身長は168cmとまあ普通、付け加えるなら痩せ方。

見た目は……人によつてはカッコイイと言ってくれる。

目の色が紅色をしているのが特徴だ。

だがこれは問題ない。

僕の体質に問題があるのだ。

それは満月の夜になると……

龍になってしまうのだ。

普通は満月の夜だと、オオカミになるって思うけど、僕は何故か龍になってしまうのだ。

よくわからないが、稀に違った体質の子が生まれるらしい。

因みに、父さんは素直にオオカミで。

母さんは……変身しない。

なぜかと言うと、この変身体質は男の人にしか現れないらしい。

ところで昔、僕はなんで龍になるのかと両親に聞いたら。

「お前には曾御祖父さんの血が強く流れているんだよ」

と答えてくれた。

僕の曾お爺さん。

別名『破壊の化身』

その曾お爺さんの逆鱗に触れれば最後、生きている人はいない……

とまで言われた伝説の人である。

僕が2歳の頃、世界旅行に行ったらしいが……よくは分らない。
そのお祖父さんは僕と同じ龍になるらしいが僕とは少し違うらしい。

曾お祖父さんは、黄色い瞳に、青い鱗に道が短く、翼が大きく
よくRPGに出てきそうな西洋竜。

逆に僕の場合は、深紅の瞳に、赤い鱗、蛇のような体に、大きな顎
をした翼と

手がくつついた感じ、近い感じではよく中国に描かれている龍に
翼に手がついた感じである。

だがこの体質は一般の人には「結婚する人」以外には見せてはいけ
ないらしい。

もし見られたら何処か遠い所へ引越す事になる。

それは僕は嫌だ。

何せこの、アオイ町で生まれて早くも16年、この町に愛着はある。
この町の人は少し血の気は多いが、とってもいい人ばかりである。
それに、馴染みのある友達の人とも別れるのは辛い。

辛いのだが……

今、正に引越しどころの騒ぎではなく……

異世界へ行こうとしてます。

それも明後日!!

それは幼なじみの、宝条 伊織
が原因だった。

第一話 幼なじみは異世界の人？（前書き）

第一話 幼なじみは異世界の人？

そは昨日の放課後の事であった。

僕は早く帰っていつも通りに宿題をしようと思った。
が……………

「翔！ 伊織さんが来てるわよ」

「分かった。今行く」

まだ出していない宿題を素早く出して、伊織の居る玄関へと向かった。

「珍しいね。伊織が僕の家に来るなんて……………何か用事？」

そう普通に聞く僕だったが。

「ねえ、翔君」

いきなり詰め寄ってきた。

「な、なに？」

顔が赤くなる僕。そりゃ僕だって思春期なんだからいきなり近づくとドキドキする。

それに伊織って学校でも人気あるからな……………
スタイル良いし、かなり綺麗だし、性格だっていいし……………
などと色々考えていたら。

「……ここじゃあ話せないから、公園に行こう」

そんな彼女はいつもと雰囲気違った事に気付いた。

「……………分かった」

何かある。そう思って何も言わずに僕は付いて行った。

そしてしばらくして近くの公園に着いた。

もう午後８時、公園には人は居ない。

そして月の光だけが僕等を写している。

そしてその月き当たりに写る彼女はとても幻想的だった。
儚く、脆く、ふれてしまえば消えてしまいそうな……………

そんな雰囲気だった。

そんな雰囲気の彼女をしばらく見てた。

そして彼女は急に口を開いた。

「……………転校するんだ」

「えっ？」

一瞬なにを言ったか分からなかった。

「遠い所に……………転校するの……………」

もう最後の所は耳に入っていなかった。
なんで……………？どうして……………？
そんな疑問ばかり浮かんでくる。

「…………ごめんね…………」

伊織は最後にそう言った。

「…………なんで？」

なんで謝るの？

そう言いたかった。

だけと言えない。

何故か言えない。

今の彼女を見てると…………

そんな風には言えない。

「……………」

「…………せ、せめてさ！何処に行くのか教えて？」

今の僕にはそれが精一杯だった。

「……………」

彼女はしばらく空を見ながら答えた。

「…………私ね…………実はこの世界の人じゃないの……………」

「……………は？」

「私は昔、とある異世界から飛ばされて此処にやっただ来たの……………」

「……………」

「だからね、元居た世界へ帰るんだって……」

……それが彼女の答えだった。「冗談を言っている目じゃない事は明らかだった。」

「それでね。明後日帰るから挨拶はしておこうと思ったの……」

「……そう……なんだ」

「本当は……ね……分かれたくない……けど、仕方が……無いの」

もう最後あたりは声が小さく、涙声で何を言っているのか分からなかった。

僕はと言えば……

「ふっふっふっふっふ」

……そんな雰囲気をぶち壊す不気味な声が何処からともなくした。
嫌な予感……

「全て話しは聞いた!!」

家の両親^{うち}だった。

「ってか、いつのまに!？」

そんな僕のツツコミにも気にもせず。

「翔!! 貴様も男だったらもつと言つべき事があるだろうが!!」

「そうです！！優しく抱き寄せるとか……キスするとか……」

それって、もの凄い恥ずかしいことばかりじゃないか！！
しかも伊織も真っ赤になってるし。

「そっ、そんなこと………」

「言い訳、無用だ！！」

「くっ………」

そんな一言で黙らされた僕。
僕って弱いな……けど。

「父さん、母さん。これは僕と伊織の問題だ。口を挟まないでくれ」

その反論に父さんは。

「ほう……良い度胸だな翔」

メチャ怒ってる……

これって怒られることなの？

「なら、男は黙って拳で語れ！！」

いきなり間合いを詰めてきた。

「うおい！？」

父の拳をギリギリかわす僕

「甘いわー!!」

そして今度は膝が顎をねらってきた。

「くっ……」

これも回避成功

だが、そんな順調な行動をあざ笑うかのように渾身の一撃を受けた。
後ろから……何故だ？

「えへっ」

母さんだった。

不意打ちだろ……それ。

そう思いながら僕は倒れた。

薄れゆく意識の中で、伊織だけが心配そうに僕の名前を呼んでいた。

第二話 まあ、人生色々（前書き）

第二話 まあ、人生色々

そこはとても気持ちよかった。
不思議な感覚。

ずっとここに居たいような……そんな感覚。
だけどそんな訳にはいかなかった。

「…………んあっ……」

妙に艶めかしい声がしたからだ。

…………あれ？そう言えば僕何処に居るんだ？
少し目を開けてみると……
なんと目の前に伊織の顔があった。

「………………あれえ？」

頭の中が真っ白になった。
え？なんで？

目の前にある伊織の顔はめっちゃくっちゃ可愛かった。

…………ってそうじゃない！！

これはヤバイ！！とてつもなくヤバイ！！
どうにか顔を逸らそうとするが。

「んっ…………」

伊織の腕が僕の首に巻き付いてきた。

って、動けない！？

しかも顔がさらに近づいてくる！？

ヤバイ！！ヤバイ！！ヤバイ！！

このままでは僕の理性が持たない！！

どうにかして脱出を！！

そう思つて逃げようとするが

「か、からだが動かない！？」

所詮男の子。脳と体がリンクしているとは限らない。

すこしは冷静になれ僕。

そう、まずは周りを見て状況判断！！

何故か一緒に寝てる伊織。

そして昨日殴られた頭が痛い。

そしてここは……何処？

知らない部屋だぞ。

……僕の部屋じゃない事は確かだ。

だが、そんな事態から一気にやばい方向に行った。

「もう起きた？」

誰かの声がした。

「じゃあ、見て来るよ」

もう一人の方が返事をした。

見てくるって……まさか！？

「オーイ、入るぞ」

やばい！？この状況は見られたら……

だが、時すでに遅し。

「おっ……………」

「……………」

つい目があってしまった。

「…………いやゝごめんね。お楽しみだったね」

「いやいや！？違います！！」

全否定します。これは事故です！

「まあ、そんな時はちゃんと……………な？」

「何が！？」

「まあ、それは後にしてもう起きろよ」

「だったらこの状態をどうにかしてください」

本当に助けてください。

「自分でどうにかしろ」

にやにや笑いながら座った。

「そんな他人事のように……」

つて、そう言えば貴女は誰ですか？
よく考えたら見たことのない人だ。

「ん？どうした？」

不思議そうにこっちを覗いてきた。

「あの……あなたは誰ですか？」

今さらだが、一応聞いておいた方がよさそうだ。

「ん？私か？私は宝条ほうじょう 志穂しほ。こいつの姉さ」

……知らないぞ、そんなこと。

「まあ、私は別の所に住んでるからな」

「はあ……そうですか」

まあ、よく見たら確かに似てるかも……
しかし美人だな……
顔立ちも綺麗だし。

姉妹そろって美人揃いとは……
………て、そうじゃない！
今の状況をどうにかしないと……！！

しばらくしても進まなかったため、志穂さんに助けられてどうにか脱出した。
だがそんな中でもずっと寝ている伊織もある意味すごい。

第三話 いつの間にかこんな事にな? (前書き)

第三話 いつの間にかこんな事に？

この世界とは違うもう一つの世界。

それは最も近い物でもあり……

最も遠い物でもある……

遙か近く、遠い世界。

「で、明日行くわけだけど……準備は出来たか？」

いきなりで解らない人もいるだろうから一応説明しておく。

この人は宝条志穂、伊織の姉である。

僕も知らなかったが、この人は今まで別の所にいたらしい。

その志穂さんが、意気揚々と言った。

どうやらこの人も行くらしい。

後で訳を聞いたら『面白そうだから！』だそうだ。

まあそれはいい。どうせ僕には関係のない話だから……そう、関係のない話だったのだが……

「勿論、翔もだよ？」

志穂さんの口から有り得ないことを聞いた。

「……は？」

今、なんとおっしゃいましたか？

「^{カケル}君も行くんだよ」

もう一度言ってくれた。

「翔君も一緒に行くんだね」

いやいや伊織なんでそんなに嬉しそうなの？
それより……

「なんで僕まで行かないといけないんですか？」

伊織達は自分達の世界へ帰らないといけないのは分かる。
だが、僕が行かないといけない理由なんて何処にもない。

「翔の両親が『ついだから連れて行け』って言ったからだ」

……あの親は何を考えて生きてるのだ？
有り得ないだろそれ。

「……一端、家へ帰って良いですか？」

「いいよ。まあ無駄だけどね」

何かムツときたけど此処は大人しく我慢。この怒りはあの両親（馬鹿親）へぶつけるのだから……

「じゃあ、行って来ます」

そう言つて立ち上がつて出ていった。

「…………お姉ちゃん、翔君行っちゃったよ」

心配そうに見ていた伊織が、彼の出ていって方を見ながら言った。

「なぐに、すぐ戻ってくるさ」

何かを知っているような言い方だったが、こう言つた時の姉がその事について教えてくれないのは伊織も知っていたのでそれ以上は聞けなかった。

その頃、明星翔はというと…………

家には着いた。

着いたのだが…………

「…………嘘だろ？」

自分の家が空き家になっていた。

「……………何故？」

本当になんでこんな事に…………

そう思いながら玄関付近まで近づいて行くと。

「ん？」

何か白い紙が挟まっていた。

……とりあえず、行って見てみる事に。

「……………何これ？」

最初はよく解らなかった。

だって此处に書かれているのは。

僕が伊織の婚約者扱いになっているのだ。

しかも結婚前提で……

「な？あ？はあい？」

もはや言葉にならない。

「う、うそ？なんでこんな事に……………」

僕は同意してないはず…………

そう同意してないんだ。

落ち着け。落ち着け、僕。

これは無効なはず…………

そう思つてよく見てみたら…………

親同士の同意で決まっていた。

「……………」

…………初めて殺意をいだいたよ。

許嫁を通り越して婚約かよ…………しかも結婚前提で…………

有り得ないよ…本当に…何考えて生きてるんだ？本当に……
だが此処にいても何の解決にもならない。
とりあえず、伊織の家に帰ることにした僕だった。

くしばらくして～

「おつ、帰ってきたな」

そう言つて僕を家に入れた。

「……あの、これ一体どういうことですか？」

そう言つてこの紙を見せた。

「ん？これか？」

その紙を見た志穂さんは……

「わはっははははははは……！！！！」

笑った。

「これは笑いごとじゃないですよ……！！」

本当に勘弁してください。

「いやいや……これは初めて知つたよ」

「これは？」

って事は他に何を知ってるんですか？

「私が聞いたのは、翔の両親は海外旅行に行ったってことだけ聞いたから……」

ああ、成る程……

その間、僕が家に帰らないように家を売ったわけか……

「なんだか新手の嫌がらせみたいだな」

しかも勝手に海外に行ってるし
もうどうでも良くなったよ

「でもこれじゃあ、私は翔のお義姉さんになっちゃうわけだ」

何か嬉しそうに言う志穂さん。
そして何を思いついたのか

「ちょっと待ってる」

そう言っただけで行った。

「……………」

ものすごく嫌な予感がするのは何故だろう。
そう思った時

「翔君……」

伊織が顔を真っ赤にしながらかつちに来た。

「あつ、あの……………」

「どうかした？」

「ふつ、不束者ですが……………よろしくお願いします」

もうこれ以上に無いくらい真っ赤になって言った。

「え？……………な、なにが！？」

……………まさか！？」

「伊織にあれ見せたんですか！？」

「いや、別にいいでしょう？」

「いや、良くないよ！？」

「え？なにが？伊織が嫌なわけ？」

志穂さんが、伊織に聞こえるくらい大声でそう言ってしまったため

「え？そつ、そうなんですか？」

なんだか、今にも泣きそうな伊織

「いつ、いや、僕は別に伊織が嫌じゃ無くて……………」

必至に説得する僕。

「じゃあ、何がいけないんですか？」

涙目になった伊織が顔を近づけてくる。

……ヤバ、メツチャ可愛い。

僕は顔を真っ赤にしながら

「えっ、えと……別にいけなくも無いよ……ね……」

まっすぐ伊織を見られないよ……
だが、それを勘違いして

「私の顔が見れない……って事は嫌なんだ……」

もう限界まで来た涙がまさに零れそうな感じだ。

「え！？ちっ、ちがうよ！！」

かなり焦る

その様子を見ている志穂さんと言つと……

「いや、修羅場だね翔」

思いつき楽しそうに見ていた。

……誰のおかげだと思ってるんですか？

そんなこんなで、結局、伊織を説得するのに一時間は掛かってしまった。

そのときの僕はとても可愛く面白かったらしい。
と、後に語る志穂さんだった。

第四話 始まりはこんなもの（前書き）

第四話 始まりはこんなもの

「……………」

周りを見る限り森だ。

何処をどう見ても木しかない。

しかも僕一人だけ。

「……………おい」

そう言っただけ周りを見るがさっきと変わらない。

「……………どうしてこんな事に？」

本当にどうしてこうなったかというところから数時間前である。

数時間前：宝条家にて

「じゃあ、行そ準備は大丈夫か!？」

相変わらずテンションが高い宝条志穂さん。

まあ、いつもそうだが、今日はいつもとは違ってかなり高すぎるくらいだ。

「まあ、大丈夫じゃないかな……………多分」

僕がそう答えると。

「あまい！！その考え方は間違っているぞ！！？」

何故か怒られた。

「おっ、お姉ちゃん……ちょっと落ち着いてよ。子供じゃないんだから」

伊織が志穂さんをなだめる。

いつもと立場が逆だな。

「めんぼくない……」

怒られたせいかもしれないと感じに戻ったが、雰囲気は相変わらずだ。なんかちよつと心配だが、まあ、これは仕方がない。僕も少しわくわくしているからな。

「で？僕等が行く所は大丈夫なんですか？」

いきなり行った場所が紛争地帯とかだったら災厄だからね……

「ああ、その心配はない」

そう断言する志穂さん。

何故そう断言できるんですか？

「ふっふっふ」

不敵に笑う志穂さん。

「その訳はだな……………」

「……………その訳は？」

「……………女の感だ」

「……………」

……………そうですか。

僕。行くの辞めてもいいですか？

「まあ、今は冗談だ」

「でしょうね」

そうでなかったら僕は行きたくないですよ。

「まあ、実は因果の関係や因果の性によってあっちの世界と連絡が取れるんだ。だからもうこっちからあっちの知り合いに連絡済みって訳！！」

嬉しそうに説明する志穂さん。

……………って。

「因果の関係ってなんですか？」

なんか僕にはよく解らない単語が出てきたぞ。

「まあ説明すると因果の関係って言うのは、直接的原因（因）と間接的原因（縁）との組み合わせによって様々な結果（果）を生起する事で、つまりその空間から始まり……（以下略）」

……すみません。もつと解らなくなりました。

そんな僕を見て伊織が解りやすく教えてくれた。

「つまりね、二つ以上の存在の間に、原因および結果として結びついた関係のことだよ」

成る程。

さすが伊織だ。志穂さんより解りやすい。

「簡単に言えば、偶然にも二つの関係が一つに結びついたってこと？」

「正解。まあ、そんな感じでこっちの世界を（Ｔ）あっちの世界を（Ｘ）で表すと、私達が行き来したせいで（Ｔ）世界と（Ｘ）世界に結び付きが出来たってこと、そのおかげで連絡がとれるってわけ。そして……（また解らなくなるので以下略）」

なんかややこしいな。

「そんな訳であっちの世界と連絡してるから大丈夫！！」

よい笑顔で言う志穂さん。

……まあ先程よりは解ったし、大丈夫ならよしとしよう。

「それなら行きましようか」

僕がそう言ったと同時に。

「じゃあ早く！今すぐ！！素早く行きましょう！！！！」

そう言っで、テンションが異様に高い志穂さんが一人走って行った。

「まっ、まってよお姉ちゃん」

その姉を追いかける伊織。

「……………やっぱり心配だな」

そうつくづく思う僕だった。

が、当に不幸なのはこの後のあとの出来事だった。

第四話 始まりはこんなもの（後書き）

第五話 人生なんてこんなもん（前書き）

感想と評価をしていただき誠にありがとうございます。
これから、よろしく願います。

第五話 人生なんてこんなもん

場所は宝条家地下

そこには一つ大きな扉があった

そこが異世界との繋がりを持つ場所

唯一の別の世界への扉

その扉にはよく解らない文字や言葉で書かれた魔法円が書かれていた
それはとても不思議な光景だった

「…………じゃあ、行くけど一つ注意がある」

先程とは打って変わったように真面目になる志穂さん。

「このゲートはあっちの世界に繋がっているの…………但し一方通行の扉だけだね」

静かな地下に一人志穂さん声が響く。

…………なんか緊張するな。

そう思って伊織を見ると、同じように緊張していた。

「…………こちらの世界とあっちの世界は殆どが同じ…………つまりこの世界

となんら変わらない。そう言っても過言じゃない……ただ一つのことを除いては……」

「あつ！そうだった……………」

何故か声を上げた伊織。

「ん？なにが？」

「じつ、ごめん。なんでも……………」

そう言つて下を向いてしまった。

……………なんだった？

そう思ったが、志穂さんの話が始まったので、そつちに集中する。

「こつちの世界では主に科学……………まあ簡単に言えば実証可能な知識
つてこと、それがこの世界では中心なのは……………」

そしてちよつと言葉がとぎれる。

「……………」

そして何故か黙った。

「……………」

とても静かになった。

「……………」

……静かすぎる。

「……………」

その静かさに緊張する僕。

「……………」

それでも黙っている志穂さん。
つていくらなんでも静かすぎだろ。

「……………じゃあ、あっちの世界では何なのですか？」

さすがにこの緊張に絶えられなくなつて質問する僕。
その僕の質問にちょっと困つたような顔をした。

「えー？まあ、なんて言うか、あっちでも科学はあるんだけど……その、あっちの世界……まあ異世界のことね、そっちでは主に魔法が主流なの……………」

……………はい？

今なんか魔法つて聞こえたような。

「あっちの世界は科学技術よりも魔法……………つまり魔術が盛んなの」

「……………本当なんですか？」

思わず声に出してしまった。

「本当のことよ」

……俄^{にわ}かには信じられないな。
そんな反応を見てか志穂さんか付け加える。

「その……伊織には言ったんだけど、まだ翔には言っていなかったのよねえ……」

……成る程、だからさっき伊織が反応したのか。
そんな納得をする僕を見て、伊織が話しかけてきた。

「……あっちの世界じゃね。貴族の人に近い人が政治をするんだよ」

「じゃあ、王様とかいるの？」

「うーん、いるみたいだけど……王には実権は殆どないよ。日本で言う天皇に近い感じ……ってお姉ちゃんから聞いたけど……」

「はあ、成る程ね」

それにしても魔法か……

本当に大丈夫か？

そんな心配をよそに話し始める志穂さん。

「ま、そんなこんなで一応前置きは終わり。次に行き方の説明ね」
そう言ってあのでかい扉の前に立った

「ほら、あんた達もこっちに……」

僕等と呼ぶ。

「いい？今から行くけどこれを持ってて」

そう言つて渡されたのは……なんだこれは？
それは小さなビー玉のような物だった。但し黒い。

「…………お姉ちゃん。これなに？」

「これは発信器みたいな物だ」

…………何故にそんな物を？

「もしはぐれてた時のためよ」

どういうこと？

「このゲートで移動すれば間違いなくあっちの世界に行く。けど、
人によつては移動する場所に誤差が出るの、同じ場所に皆行くかも
しないけど、一人だけ離れてたり……………」

「…………その誤差つてどれくらいですか？」

「人によつて変わるけど、平均一kmぐらいかな？」

そう答える志穂さん。
成る程、そのための発信器か。

「まあ、これは万が一の可能性だから多分、大丈夫」

笑顔で答える。

……なんか心配だな。

「……………」

そんな中、僕と同じように心配している伊織が居る。

「大丈夫だよ。伊織」

そう僕が問いかける。

「…………でも」

心配そうに僕を見る。

「まあ、志穂さんがあ言ってることだし。それではぐれたら、よっぽど運が悪いんだよ」

笑いながら僕がそう言ったら。

「…………そうだよね」

そう言って伊織も笑った。

「おーい、その君達。行くぞー」

そう言って僕たち三人は扉に入っていった。
光に包まれ、次に見えたときは……………

そして前回の冒険に続く

「……………」

まさかその運が悪い方に入るとは思ったても居なかったよ。

「はあゝ…ついてないな……………」

寂しく一人、森に立っている僕。

……………とても虚しい。

その後、何時間か経過してようやく迎えが来た。

その時は既に夜であった事は言うまでもない。

もうこんなのはこりこりだなとつくづく思う僕だった。

第六話 こう言った時だけ仕事が速い人

ある意味、話は唐突だった。

それはここに来て三日後の日のことでした。

僕等はいま、この異世界で伊織が住んでいたと言う家にいる。

まあ、ここに来てもう三日も経っているのだから少しは慣れてきたここに来る前に魔法がどうか言っていたがあまり気にはならなかった

まあ、僕の存在自体が、ある意味非現実的だからなのかもしれないが、

僕が思っていたよりはそうではなかった

……だが、後々その考えは間違いだったと気付くにはもう少し時間経ってからであった

その布石がまず志穂さんの一言だった

「君達、明日から学校だからよろしく」

いきなりそんな事を言う志穂さん

伊織は買い物に出かけているため、今僕しか此处にはいない。

「ん？理解できなかったかな？」

いや、理解は出来ですけど……何故にそんな事を？

「いやゝだってさ、君らまだ学生でしょ？」

「確かにそうですけど」

「なら明日から学校ね」

有無を言わせない感じた。

まあ、確かに僕や伊織はまだ学生だから学校に行くには問題ないが、問題はその後だった。

「因みに、翔君と伊織は魔法課の方に入ってもらってからね」

「……………は？」

いま言った事が一瞬分からなかった。

「なんだか今、魔法課って聞こえたような気がしましたけど？」

「ん？そうだけど？」

何事もなかったかのように言う。

「いやいや、何故にそうなるんですか？」

そんな質問にやれやれと言った表情をする。

……………なんだか腹が立つなその表情。

「それはまず第1、伊織は元々この世界の住人だから魔法が使えないと不味いでしょ？」

「まずいのかはどうか知りませんが、本人から許可は取ったんですか？」

「そこら辺は抜かりなし、もう取ってあります」

なんだかこの人は嬉しそうだな。
まあそれは別として。

「なんで僕も何ですか？」

そこら辺が分からない。

伊織は先程説明した理由でいいとして、何故に僕が？

「そんなの決まってるじゃない！！」

驚いたようにしてから。

「その方が面白いからに決まってるからよ！！」

断言した。

明らかに面白いと断言した。

それに僕の意見は明らかに聞いてないし。

「ん？不満そうね」

「そうですよ、なんで伊織には聞いたのに僕には聞かなかったのですか？」

「聞いたら承諾する？」

「しません」

「だからよ」

「は？」

意味が解らない。

「言っても翔君が承諾しないから勝手にきめた」

こらこら。

それじゃ横暴だぞ。

それに僕は納得してないし。

「あ、もう無駄だから」

「は？なんで？」

「もう魔法課で申請したから変更は不可能」

その一言で結局、僕は魔法課の方に行くことになってしまった。

それがこれから人生を左右するだなんてこの時の僕は思っていなかった。

第七話 忘れていた事実？（前書き）

お久しぶりです。

今回から、また書いていきます。
宜しく願います。

第七話 忘れていた事実？

それは今日の午後に起きた出来事だった。

「さあ少年！少女よ！明日を乗り切るために、必要なのはなんだと思うか？」

いきなり大声、かつ意味不明なことを言い出す志穂さん。
「っ」か、唐突過ぎて話についていけない。

「…………お姉ちゃん一体どうしたの？」

先程、買い物から帰ってきた伊織。
どうやら姉の対応に困っているみたいだ。

「ふっ、私はね今気づいたのよ！」

「いつも人生を爆走している事にですか？」

「…………それはどういう意味？」

渋い顔をしながら、僕に聞いてきた。

「言葉の儘ままの意味ですけど？」

「……………」

しばらく固まったまま。

「あはははは！細かい事は気にするな！」

笑いながら誤魔化した。

ってか、やっぱ自覚はしてたんですね。

「そんな事よりも、他に重要な事があるでしょうが……！」

話題を戻すように、先程よりも大きな声で言った。

「それは……」

「それは？」

少し間を空けてから……

「なんと！私はすっかり忘れていたのよ……！」

話がわからない。

いや、正確には、何が言いたいのかが理解できん。

「お姉ちゃん。もう少し分かるように言わないと……」

呆れながら、伊織も言う。

やはり伊織も理解できなかったか。

「ならば簡単に説明しよう……！」

のりのりのテンションで言う。

最初からそうしろ。

「実は、明日からの学校の事だけど……………」

その何処に問題が？

「教材とか必要な魔道具とか……………買いに行くのをすっかり忘れて
て」

「……………」

何となく落ちが分かって気た。

「だから、今から買出しに行かないと間に合わないのよね」

笑いながら重要な事を言う。

「おい！？」

何で重要な事を忘れてるんだよ！！

「お姉ちゃん！？」

伊織もかなり驚いている。

「と言う訳で、今から行くぞ！！」

玄関に直行して行く志穂さん。

「じゃあ、僕は夕飯の支度でもするか」

先程、伊織が買ってきた材料を見ながら言う。

「そうだね。お姉ちゃん、なるべく早く帰って来てね」

伊織は僕を手伝おうと一緒に準備する。

「っておい！？私だけ？私だけのけもの！？」

早々と玄関からこっちに帰ってきた。

「いや、当然でしょ？」

「そうだよ。もとあと言えばお姉ちゃんが悪いんだから」

伊織もこちらの味方につく。

……が。

「ふつ、ところがどっこい。君達が来ないと話しにならないのだ」

強気で語る。

「何故なら！教材云々はともかく『魔道具』はその人にあつた物でない使えないからだ！！」

さらりと重大発言。

「……………」

伊織は呆れて、僕は……

「なんでそんな重要な事を忘れてたんだよ」

「まあこつちにも色々あるのよね」

何だかんだいって誤魔化した。

「……………それに最近、姫様がなにかとうるさいから

小さな声で何か言う志穂さん。

「ん？なんか言ったか？」

「いや、な～んにも」

笑顔でそう答えて。

「では皆行こうか！？」

「じゃ、今日の夕食は志穂さんの奢りね」

「……………え？」

「そうだね、お姉ちゃんが悪いんだから、それくらいしてね」

嬉しそうに伊織が言う。

「ちょちよつと！？それは…！？」

「「いい訳は無し」「」

第八話 買出しの時には気をつけよう(前書き)

感想と評価をしてくださった方。
どうもありがとうございます。

第八話 買出しの時には気をつけよう

この異世界。通称『Mirror the Universe』と言っらしい。

まあそんな事はどうだって良い。(いや、本当は良くないが) 今大事なのは、明日の為に必要な教材と魔道具である。そこで、この町で一番大きい大通りに来ていた。

教科書や魔道具を買いに来たのは良いのだが……

「まさか逸れるとはな……」

また一人になるとは思ってもいなかった。

「さて、どうするべきか」

周りを見ってみるが人・人・人……人が多すぎるわ。こういった時は動かずに待っていた方が良いのかもしれないが、何せ人が多すぎる。

はつきり言って、僕は通行の邪魔にしかない。

「どこかの店に退避でもするか」

あたりを見渡して……

「おっ」

古びた店を発見。

何か雰囲気的に気に入ったので、近づいてみる事に……

「……………うわぁ」

近づいて見た感想。

思っていたよりも…ボロい。

今にも崩れそうで、軽く蹴っただけでも壊れてしまいそうな店だった。

「一体何の店だ？」

看板らしい物がない。

まあここら辺に立っていると言う事は、少なくとも『魔法』に関する店なんだろうけど……

「これはどう見たって廃墟だよなあ」

見た感じの感想を述べたら。

「ここは廃墟じゃないよ」

隣からそう聞こえた。

「え？そうなの？」

思わず聞き返した。

「そうだよ。ここは歴^{れっきと}した『魔道具』の店だよ」

「そうなのか」

素直に驚いた。

こういった店は、見た目で判断していけないものだな、と思いながら。

新たな疑問が出てきた。

はて？僕は一体誰と喋ってるのだろうか？

「ん？どうかした？」

喋っている方を見ると……女の子だった。

身長は僕よりほんの少し低く。(160cmぐらい？)

見た目は僕と同じか、年下に見える。

髪型はショートカットで色は赤みがかった黄色。

瞳の色は橙色。

活発そうなイメージの……美少女だ。

「おい、聞いている？」

いつの間にか、彼女の顔が目の前にあった。

「え？あ！？」

吃驚して、思いつき後ろに下がったら……転んだ。

「大丈夫！？」

その子は僕の反応に驚いたみたいだ。

「……大丈夫だよ」

少し痛かったけど。

「そう？ならいいけど」

そう言つて僕が立ち上がるのを待つて。

「ねえ？名前、聞いていい？」

嬉しそうに聞いてきた。

「いいよ。僕の名前は『明星 翔』」

「明星…翔…」

僕の名前を聞いたら……なぜか悩んでしまった。
そしてしばらくしてから。

「……………ねえ、翔つて読んでいい？」

真面目な顔をしながら聞いてきた。

「いいよ」

あっさりと僕が承諾したら。

「え！？いいの！？」

何故だか知らないけど、驚いたみたいだ。
一体何処に驚くような要素があつたかな？

「あ、ごめん！気にしないで良いよ」

照れ隠しをするように誤魔化した。

「私の名前は……………」

といいかけた所で急に止まった。

「……………どうしたの？」

「いや…ねえ……………」

その子は少し悩みながら
小さい声で『いいけど……………うん…もし……………したら』と独り言
をぶつくさ言いながら。

「ま、いいか」

と一人になつとくして。

「私の名前は『リン・クレンジエン』だよ。よろしくね」

そう彼女は名乗った。

第八話 買出しの時には気をつけよう（後書き）

感想、評価、又はその他。

・ ・ ・ まあ色々とそこら辺を含めて、出来たらよろしく願います。

第九話 これからが始まり？（前書き）

あと二・三話ぐらいこんな風に続いていきます。

その後は学園編です。

感想と評価出来ればお願いします。

第九話 これからが始まり？

実は現在進行形で迷子になっている僕だが
いつの間にかリンと一緒に、あの古びた廃墟（正確には魔道具専門
店）に入る事になっていた。

「そう言えば翔って学校はどこ？」

扉を開けながら、リンが聞いてきた。

「うーん……わからない」

そう言えば『学校に行く事になっている』とは聞いたが、何処の学校かまでは聞いていなかったな。

「分からないの？」

「うん。今年から入学するのは確かだけどね」

「あ、じゃあ私と同じだね」

嬉しそうに言うリン。

「って事は、翔は魔道具を買いに来たの？」

「うん、そうだよ」

だけど途中で皆と逸れちゃった
とは言えない。恥ずかしくて言える訳がない。

「じゃあ、この店で正解だよ」

「え？正解？」

なにが正解なんだ。

「ここは主に魔道具を扱う店だからね」

「へーそうなんだ……」

たまたま見つけた店が専門店だったとは……運が良いのか？悪いのか？

「いらつしゃい」

奥の方に入って行くと一人の女性が立っていた。

髪は金色、瞳は青く、人目見ただけで美人な人だと分かる。

「ご用件は？」

「魔道具申請に」

「分かりました。ではこちらへ」

そう言って案内される。

「ねえ」

僕が小声でリンに聞く。

「なに？」

「『魔道具申請』ってどういうこと？」

僕がそう聞いたらリンは軽く驚きながらも答えてくれた。

「『まどうぐしんせい魔道具申請』って言うのはね、自分にあった魔道具を作ってもらえるのよ」

「作る？」

「そう、魔道具は個人によって様々な種類。属性。形があるの」

「ふむふむ」

「それを作る儀式みたいなのが『魔道具申請』って言うの」

そうなのか……なんか初めて魔法の事を知ったな。

「因みに、ここで申請した魔道具は、個人登録されて、犯罪防止にも役立てるのよ」

「為るほど……なかなか複雑と言うか、分かり易いという……」

そんな話をしていたら、先程案内してくれた女性の人かクスクス笑いながら。

「お二人様はもしかして恋人同士ですか？」

などと聞いてきた。

確かに今の会話を聞いていたら、そんな風には見えなくてもないけど・
・・・それは勘違いですよ。

「い、いえ！…その、私たち、まだそんな関係じゃ！？」

頬を赤くしながら否定するリン。

「あらら、残念」

そう言って。

「でも『まだ』なんでしょ？じゃあ頑張ってね」

どうやら勘違いされて、リンは応援された。
そしてまた前の方を見ながら女性は案内を続けた。

「うゝ……絶対あれは誤解したままだよ……」

顔を赤くしたまま恥ずかしそうに俯くリン。
けど、その割りに微妙に嬉しそうに見えるのは何故だろう？

「まあ気にする事はないと思うけど」

僕がそう言っただけなら。

「……………」

なぜか不満そうな顔をした。
そんな会話がありつつも、目的地の場所に案内されたら。

見慣れた人物達がいた。

「お、アホだ！阿呆がいるぞ！」

そう叫ぶのは、毎度おなじみの志穂さん。

「翔君！一体何処に行ってたの！？」

少し怒りながらも、心配するように駆け寄って来る伊織。

「あれ？どうしてここに？」

驚いた僕。

「何言ってるんだよ。あん時に私が言ってたの聞いてなかったのか？」

「あの時？」

はて？なにか言ってたか？

「…どうやら聞いていなかったみたいだな」

ため息をつきつつ、教えてくれた。

「出かける前に場所を説明してただろうが」

……………そう言えばそうだったような気がする。

「まったく、しんぱ…い？」

僕に近づいて来た志穂さんが、隣を見た瞬間、固まった。

「お？お？え？」

かなり驚いているみたいだ。

「！？ あっ！」

そして同じ用リンも驚いていた。

二人ともお互いを見ながら、しばし呆然としている。

「……一体どうしたの？」

僕の質問がするが、二人とも答えてくれない。

「お、お姉ちゃん？」

伊織も姉の反応に少し驚いているみたいだ。

そしてそんな感じで少し時間がたった時、志穂さんが口を開いた。

「なんで？なんで…：姫さんがここに？」

「え？」

姫さん？

誰の事？

一体なにがどういうことだ？

謎が謎のままだった。

第十話 魔道具申請中（前書き）

出来れば感想、評価お願いします。

第十話 魔道具申請中

珍しい。非常に珍しい。

何故なら、明らかに困っている志穂さんを見るのはこれが初めてだからだ。

「…はあ」

ため息をつきながらも、志穂さんは喋った。

「姫さんよお。護衛の人達はどうしたんだ？」

「……………」

姫さん…多分、リンの事を言っているのだが、リンは答えない。

「はあ、まあ確かにあれは嫌だと思っけどよ、あれはお前さんの為にだな……………」

ちくちくと地味に説教を続けている。

つか、一体全体どうしてこうなってるの？

「ま、私がお前さんの護衛につくから…他の奴らには後で説明しやるよ」

どうやら話が終わったらしい。

まあ僕と伊織は明らかに、おいてきばりだけだな。

「おい、翔」

なぜか僕が呼ばれた。

「えーっと…色々聞きたいことがあるけどよ」

言葉を濁らすように。

「まあ…なんだ？あれだよ。姫さんの事だけど……」

「ま、まって！-」

そこで初めてリンが口を開いた。

「お願い！！言わないで！！黙ってて！！」

真剣な表情をしながら何度も言う。

「護衛の事は誤るから！！お願い！！」

そして、だんだんと涙目になっていくリン。

「……………」

そんなリンを真剣に見つめる志穂さん。

「はあ…わかったよ」

そう言うてから。

「ただし、今後、こんな事はするなよな」

いつもの笑顔で志穂さんはリンに言った。
リンは嬉しそうにうなずく。

「じゃあ、今から魔道具を申請しに行くぞ」

いつも通りのテンションで先に行ってしまった。

「……………」

で？

結局、僕はどうしたらよかったんだ？

「なんか大変だったね」

伊織が同情するように言った。

まあ色々あったが、あの場所から少し歩いた場所にまた移動した。
そこにつくまでに、どうやらリンと伊織はすっかり打ち解けあい、
既に仲良くなっていた。

まったく、女の子ってのは凄いな

そしてついた場所は大きな魔方陣が描かれていた。

「さて魔道具を作るわけだが……………」

そう言っ僕と伊織のほうをチラリと見る志穂さん。

「まあ初めて見る奴らが多いから説明しておく」

そう言つて魔方陣の中へ入つて行く。

「この魔方陣は『意識のシンクロ』と『契約』の意味がある」
意識のシンクロ？契約？

「まあ簡単に説明するとだな、入ると魔道具が出来る魔方陣だ」
かなり略したな。

「その魔道具は自分自身、つまりもう一人の自分みたいな物だ。だから魔道具は『この世で一つしかない』大切な物だ」

そう言つて魔方陣の中から出てくる。

「まあ実際にやった方が早いな、三人ともここに入れ」

そう言われたので、僕と伊織とリンは素直に入つて行つた。

「お前らは意識を魔方陣に集中させるよ」

志穂さんが完全に魔法陣の外にでた瞬間。

「…では始めますね」

先程案内してた女性の人杖を構えながら呪文を唱え始めた。

「オリガントよ…我ら、精霊の名の下に」

魔方陣が光り始める。

「願う思い、集う力、偉大なる神々よ、彼らに精霊の加護を、力を与えたまえ」

暖かい光に包まれ、気持ちがい

【ドクン】

「が!？」

ざわめく。

物凄くヤバイ感じがする。

これは…まさか!？

「ぐ!?!う!?!」

なんだ。今は満月ではないのに!

なのに…なんで!？

そう思った時、僕の意識は闇の中へ消えた。

（宝条志穂視点）

「…………ん？」

翔の様子がおかしい？

魔方阵の外から見ていたら、明らかに翔だけが苦しそうにしている

「どうしたんだ？」

術を発動させている女に聞いてみたが、女の方も少し焦っているみたいだ。

「分かりません。ただ魔道具を具現化させようとしたら急に……」

「……」

…他の二人は大丈夫。
だか、翔だけが異常な感じ……

【ドクン】

「!」

変な気配がした次の瞬間。異常なまでの邪気が発生した。

「く!?!なんだ!?!」

体を貫くような…いや、そんな生易しいものではない。
一体何処からだ!?!
その魔力の根源は…

「翔から!?!」

驚いた事に発生源は翔からだった。
しかしここで一つの疑問が生じる。
この邪気は明らかに人が出せるものではない。
それにこの世でも、こんな邪気はありえない。

「ぐ！？う！？」

翔が呻き声を出した瞬間。

ドサッ

倒れた。

「え……………」

儀式を行っていた女性は呆然と立っていた。

「一体どうしたんだ！？」

私が慌てて聞いたら

「一応儀式は成功しましたけど…」

未だに呆然と翔を見ながら言った。

「おい、姫さん！伊織！大丈夫か！？」

二人に近づいてみると…眠っていた。

どうやら儀式の疲れがただけみたいだ。

その証拠に、二人の手には魔道具が握られていた。

「……………翔は？」

問題は翔の方だ。

慌てて近づいてみた。

外傷は殆ど無く、同じように眠っていた。

「…無事なようだな」

ほっと一息をついた直後、翔の隣に何かの気配を感じた。

「！ 誰だ！？」

その方向にあった物は……翔の魔道具であった。

〈番外編〉登場人物紹介・簡単な説明（前書き）

これは……まあ読んで見れば分かります。

〈番外編〉登場人物紹介・簡単な説明

今回は登場人物。世界観。魔法等の説明です。

他の人達の（読者の皆様の）参考になつたら良いです。

因みに、ここらの説明は『まだ小説で明らかになっていない』事もありますので、見たくない。知りたくない。そんな方は飛ばしてもかまいません。

あ、でも参考にしたい！一応見ておこう！と言う人。
ぜひ見て行ってください（＾＾）

みよしのがける
明星翔

性別

年齢 16歳

レストラルラニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：???+

属性：風・雷・?

魔道具系統：太刀

本編主人公。流されやすい性格。見た目は普通よりはやや良い方。目の色が紅色である事意外は一般的な少年である。ただ、満月の夜になると、深紅の瞳を持つ龍になってしまう。

この体質は一般的には『結婚する人』以外には知られてはいけないらしいが、もうこの異世界に来てからどうでも良くなったらしい。かなりの鈍感。趣味は読書。

ほうじょういおり
宝条伊織

性別

年齢 16歳

レストラルラニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A A

属性：火・光

魔道具系統：杖

翔の幼馴染で志穂の妹。姉と同じで、異世界の住民。翔には少なからず恋心を抱いているが、当の本人は気がついていない。性格は臆病な方で少し幼さを感じるが、これは親しい人しかい無いときで、普段は何でも出来る優等生である。料理が得意で、時々作っては翔や姉に味見をしてもらっている。怒ると怖い。

ほうじょうしほ
宝条志穂

性別

年齢 21歳

現在はレストラルラニアン魔法学院所属

教科担当：1年全般の技能教師

担当クラス：1 - A

能力ランク：S +

属性：?・光・?

魔道具系統：ハンマー

伊織の姉で最も謎が多い人物。色々な事を知っていて、この世界に

色々な情報網をもっている。大雑把な性格で猪突猛進。よく言えばマイペースな人である。いつも笑顔を絶やさない。

時々皆を巻き込んで色々と迷惑をかけている。そのたびに学年主任に怒られている。

何気に、無詠唱魔法が使える。

リン・クレンジエン

性別

年齢 15歳

レストラルラニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A A

属性：水・氷

魔道具系統：弓

魔道具を申請する時に翔に会った。志穂とは知り合いで、そこら辺がまだ良く分からない。（分かる人には分かるが）活発で明るい性格。伊織とは結構仲が良い。伊織と同じく恋心を翔に抱いているが、当の本人はまったく気付いていない。

みょうじょう

明星父&母

年齢 どちらも不明。

現在旅行中。翔を異世界に連れて行かせた（追い出した）張本人たち。

家を売り払ったり、婚約届けを出していたりと、色々悪事……

もとい、息子のためにやった。（翔談：あれはただの馬鹿親だ）
こちらの世界（異世界）にはきていない。

ここからは後に登場する人物。（もう少し下は世界観、魔法について）

ゆきむらそうすけ
雪村宗助

性別

年齢 16歳

レストラルラニアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A -

属性：土・砂

魔道具系統：槍

この学院に来て初めて知り合った男友達。かなりの美形。能天気。

やなぎさかえで
柳嵯楓

性別

年齢 15歳

レストラルラにアン魔法学院所属

クラス：1 - A

能力ランク：A +

属性：水・闇

魔道具系統：刀

この学院に来て知り合った女友達。大人しい感じ？。宗助とは幼馴染。

くさかけ さき
草陰沙紀

性別

年齢 20歳

レストラルラニアン魔法学院所属

教科担当：魔法歴史

担当クラス：学年主任

属性：木・花

魔道具系統：杖

学年主任。のんびりとした性格で志穂とは知り合い。

ちょっとした魔法の知識。

世界観

科学と魔法の共存。

しかし、科学はあまり発達しておらず、魔法技術の方が強い影響力がある。

例）車はあるがエンジンが魔力といった感じ。

魔物

この世界には魔法の影響で、不自然に歪んだ生き物たちが存在する。それが魔物である。魔物は人に危害を加えるため、それらを討伐する組織がある。

因みに魔物にもランクがあり。

一番低い順に E・D・C・B・A・S・G となっている。

魔物はレベルが高くなるにつれ知能や能力が高く、危険度も高い。Aランク以上は人語も理解できるらしい。

職業

一般的には普通の社会と同じだが、この世界では主に魔法に関する職業が多い。

例えば、魔物を狩る職業。魔道具を生み出す職業。魔導書を製作する職業など……

魔法の属性

属性は主に12通りあり

基本精霊術は『火・水・土・木・風』

中級精霊術は『炎・氷・砂・花・雷』

上級精霊術は『光・闇』

さらに上にあるのが『古代魔導術』主に禁呪と言われる物だ。
この古代魔導術は『基本精霊術』と『上級精霊術』が元になっており、種類は『獄・蒼・地・樹・暴』『天・冥』がある。
一般的には『基本精霊術』に加えて、自分で最も得意とする『中級・上級』を1つか2つ使うのが基本である。

魔導書

魔導書とは、魔力が込められて売られている本。
この本には魔力が込められており、その性質を理解した者に力を与える。

しかし理解できたからと言って、魔導書の魔力を、発動させる程の魔力が無ければ使えない。

魔道具

魔道具とは、自分の魔力を使って出来た道具。

この魔道具は作り出した者にしか使えない。

魔道具は主に魔法発動体として使用する。

それ以外は武器として使用したりする人も多い。

能力ランク

能力ランクとは、その人が持ち合わせている能力、潜在力、危険度

を総合的に表したものである。

一番高くて『SSS』ランク（実はこれよりも高いランクが存在するがそれは別である）

一番低くて『E-』ランクである。

一般的には『C+』から『D-』あればよい。

因みに翔たちが通う、レストラルニア魔法学院は優秀な学校で、基本的に『B』以上で無ければ入れないらしい。

以上で簡単な説明を終わります。

〈番外編〉登場人物紹介・簡単な説明（後書き）

所で……僕は一つ思った事がある。

翔「唐突になんですか一体。」

この作品は……本当にファンタジーでよいのか？と。

翔「……それは一体どういう事だ？」

自分的には異世界学園コメディーを書いているつもりなのだが……
・どうもね〜

翔「別に良いんじゃないですか？」

そうなのか？前に友達に聞いたら『これってなに？ラブコメでも書くつもりなのか？』って言われたぞ。

翔「はぁ……まあ大変ですね」

おいおい他人事かよ。

翔「だって、最後にはあんたが決めるんだろ？」

いや、読者が決めるんだ。

翔「は？どういう事？」

もうこの際だから、読者に決めてもらおう。

翔「いいのか？」

いいんだよ。

つてな訳で、この小説を読んでいる皆様方、
『ファンタジー・学園・コメディー』
どれに当てはまるか自分に教えてください。

翔「……所で、教えてもらってどうするんだよ」

そっちに近い感じで書いていこうかな～と思って。

第十一話 始まりは遅刻というオチ (前書き)

やっこのこさ学園編です。
前置きが長かったな・・・

第十一話 始まりは遅刻というオチ

朝日が眩しい。

「うーん……なんか気分がいいな」

寝起きのためか、頭がボーっとしている。

「こんな清々しい日には、きっといい事がありそうだな」

周りを見ると誰もいない。

まあ一人部屋だからね。

「それにしても……」

いやに静かだな。

いつもなら伊織が姉を起こしたり、志穂さんが朝から酒を飲んでいたり五月蠅いのだが……

「はて？珍しいな」

まあ深くは考えないようにしよう。

「そう言えば今日の予定はどうなってるんだ？」

少し離れた所にカレンダーがあった。

どうやらこの世界も、僕らの世界同様、四季や日数は同じらしい。

「今日は……え？」

その日は・・・入学式？

はて・・・入学式？

一体何の・・・って僕達の入学式じゃん！！

「今日は入学式だったのか！？」

枕もとの時計を見てみる。

現在、9時45分。ここから学院までは約20分は掛かる。
入学式は10時から始まるので・・・遅刻になる。

「げ！？」

これじゃ間に合わない！！

「くそー！！あの二人わざと見捨てたな！？」

こうして慌しい朝とともに、僕の学院生活が始まった。

時刻は10時30分。

初っ端からの遅刻は避けたかったが、どう見たって遅刻する時間なので、諦めてのんびりと来たらこんな時間帯になってしまった。
まあ人生諦めが肝心とも言っしな。

「それにしても・・・無駄にでかいな」

現在僕がいるのは校門。

ここから見ると西洋の城か、何処かの要塞と言った感じだな。それにしても……綺麗な所だな。

古い建物と聞いていたが、意外と整っている。

これも魔法のおかげかね？

そんなこんな考えながら、正門らしき所を通って中に入る。勿論今は誰もここには居ない。僕のみだ。

「さて……どうしようかな？」

入学式は11時までである。

まあ、途中から入ってもいいけど、場所は知らない。おまけに途中からと言うのは、少し恥ずかしい。

「しかし、こんな所によくもまあ入れたもんだな」

聞いた話では、この『レストラルニアン魔法学院』は魔法関係ではかなり有名な学校で、名門中の名門とまで言われているらしい。

どんなに優秀な人でも入るのは難しいと言われている程だ。

どうしてこんな所に入れたのが謎なくらいである。

ここに入れた本人、志穂さん曰く『私って以外と有名なんだよね』と言う一言でかたづけてしまった。

ある意味身近な人で最も謎な人物でもある。

「で……結局僕はどうすればいいんだ？」

一応、昨日作られた魔道具は持って来てはいるが、重くて邪魔にしかなら無い。

「そう言えば……昨日、魔道具を申請しに行った所からの記憶

が無いな」

今さらだが、そう思った。

あの時、急にあの衝動にかかれたんだよな。
本来、満月の時にしかない。

あの衝動に……

「まあ、なんとも無かったんだからいいか」

だけど、一応気おつけておこう。

なんせこの学校は普通とは違う。

ここは魔法の学校だ。

注意してて損はない。

「まあそれよりも、今の状況をどうにかしないとな」

一人寂しくって言うのはどういうもんかね。

と思っていたら。

「おや？」

少し先に進むと、誰かが居るではないか。

「僕と同じような人かな？」

同じような人〃遅刻した人という事だ。

相手に気付かれないように、そそくさと近づいてみると。

二人の男女が、建物の入り口の前にいた。

「あれ？もしかして……僕達遅刻？」

のんびりした口調の少年が隣の少女に言う。

「当たり前だ馬鹿者！？だから早く起きろと私は言ったのだ！！」

隣の少女がその少年を怒鳴った。

「け、けどさ……僕は先に行っても、良いって言っただろ」

「うるさい。黙れ馬鹿。阿呆。鈍間。」

どうやら取り付く島も無いようだ。

見てて面白い。

しかし僕と同じように遅刻した人がいるとは……. なんと
言っているやら。

「まあもう過ぎた事だし…….」

そう言っ

「同じような人があそこにも居るみたいだしな」

僕が居る方向を見ながらいった。

「あら？」

気付かれた？

「そこに隠れてる人。出てこい」

凜とした声で言ってきた。

どうやら既にはれているらしい。
なら素直に出て行くでしょう。

「やあ、どうも！」

軽く笑いながら、二人の所に行った。
まあ第一印象が肝心だしね。

「やあ、どうも」

少年は僕の声に反応して挨拶したが、少女は……

「お前、私たちに何かよう？」

敵対心バリバリだった。

どうやら、少し機嫌が悪そうだ。

「い、いや……べつにようって訳じゃ……」

ぎこちなく僕が答えたら。

「楓。八つ当たりであんまり威嚇しない方がいいよ」

少年がなれた口調でその少女に言った。

「……」

当然睨まれた。

しかしそんな事は気にせずに、自己紹介をしてきた。

「僕の名前は雪村宗助^{ゆきむらそうすけ}。でこっちの子は……」

「柳嵯楓^{やなぎかへで}だ」

少年……雪村が言う前に、その少女。柳嵯さんが答えた。

「僕の事は宗助でいいよ」

そう言ってからジーンと僕の方を見てきた。

「？」

僕がどうしたのかと思ったら。

「君の名前は？」

のんびりと聞いてきた。

そう言えば僕は言っていないな。

「僕は明星翔^{みょうせいあける}。よろしく」

「よろしく」

ニッコリと笑いながら挨拶した。

「……」

こちらの方はぶすつとしながら僕を見ていた。

「あの……」

「……なんだ？」

「よろしく。柳嵯さん」

「……」

少し僕を見ながら。

「……私は楓でいい。」

それだけ言った。

「照れてるの？」

宗助が楓さんにそう聞いたら。

「阿呆か」

と軽く睨まれた。

第十一話 始まりは遅刻というオチ（後書き）

あとがき劇場（僕龍貴姫編）

ここまで来るのが長かったな。

翔「そうだな。」

この話は一応、異世界学園ラブコメと言う話だからな。

翔「また色々と混ざってるな。」

そうか？一応この前のあとがきで読者の皆様方に聞いたら、これでいいみたいな事になったぞ。

翔「まあ無理の無いようにしとけよ。」

そうする。

翔「所でいきなり遅刻って……」

まあ気にするな。

翔「そうするよ。」

まあ、それはさて置き、感想やアドバイスをくださった読者の皆様。どうもありがとうございます。

これからがメインみたいな感じなんで、宜しくお願いします。
感想、評価、なんか要望があったら言ってください。

第十二話 魔道具覚醒（前書き）

やばいです。

え？何がやばいかって？

長いんですよ。半端なく。

頑張って書いたのはいいんですけど、メチャ長くなってしまいました。

感想と評価、待っています。よろしくしくお願いします。

第十二話 魔道具覚醒

やる事がない（遅刻した）ので、この二人としばらく話す事にした。
・・・それにしてもこの二人。美形だな。

さつきは遠くから見ていたから気付かなかったけど、かなりのものだ。

宗助の髪は綺麗な銀色。瞳は薄い青色。身長もけっこうあるし（170cmくらい？）おまけに顔立ちが整っているから、誰がどう見たってクールな美少年だ。

・・・ただし、喋ると明らかにその印象は変わるけどな。

楓の髪は茶色く、後ろにまとめている。まあ俗に言うポニーテールってやつですね。それがかなり似合っている。瞳は宗助と同じような色で、凛々しい顔立ち。身長もそこそこあり（多分僕と同じか、それ以上）理知的な印象だ。

こういった人はきつと同姓から持てるだろうな。

まあそんな感じでこの二人はかなりの美少年、美少女だと言う事だ。この二人がであって、さらに僕もこの二人と知り合ったんだから、本当に世の中って不思議なめぐりあわせをしているよな。

そんな事を思いながら話していると、宗助が気になる事を言い出した。

「そう言えば、翔の魔道具って珍しい形してるね」

宗助が僕の背中に背負っている魔道具を見ながらそう言った。

「確かに、鞘に納まった大剣なんて聞いた事が無いな」

同じように僕の魔道具を見ながら言う楓さん。

「え？そうなの？」

てっきり、似たような魔道具が他にもあるのかと思ってた。

「うん。だって大剣の魔道具は鞘に入らないし、必要がないから、刃をむき出しにしているんだよ」

「私も、大きいけどそんな細い形状で鞘に納まっている大剣なんて見た事もないし、聞いた事もないな」

「ほ」

これってそんなに珍しい物だったのか？

「ま、僕はそんなに詳しいわけじゃないけどね」

でもかなり参考になったぞ。

「因みに僕の魔道具はこれだよ」

そう言っつて宗助は自分の前に手を突き出して。

「こい『^{ワイアーム}地竜槍』！！」

その瞬間。

宗助の前に槍が現れた。

「どう？僕の地竜槍。感想は？」

「……でかいな」

かなりでかかった。宗助の身長を軽く超える大きさだった。色は黒く。形は槍というよりはランスの方が適切だろう。

昔の騎兵が持っていたいそうな形状だった。

まあそれにも驚いたが、一番驚いたのは。

「……どうやって出したの？」

確か宗助が手を出して……なんだったけ？ワームだったけ？

「^{ワイアーム}地竜槍だよ」

「そう、それ！！」

そう言ったら突然できたんだよ！！

「あれ？翔は魔道具を作って、登録しに行ったんだよね？」

「ああ、行っただぞ」

作ってはもらったが、僕は気絶してたため、登録は……志穂さんがしてるだろ。

「……多分。」

いやまて……してないかもしれない。

なんせ志穂さんだし。

「その時に教えてもらわなかったの？」

「は？」

教えてもらおう？何が？

「なるほど、そう言う事か」

楓さんが僕の様子を見て納得した。

「へ？」

どう言う事？

「どうやら、翔は魔道具は作ってもらったが、使い方を教えてもらっていないようだな」

「え？楓さんどういうこと？」

僕の頭に沢山の？マークが出てくる。

「本来ならば、魔道具を申請しに行った時にレクチャーがあるのだが……」

「レクチャー？」

そんなのがあったのか！？

ずっと気絶（今日の朝まで）してたから受けてないぞ！！

「どうやら受けていないみたいだな」

どうやら表情に出ていたらしく、呆れていた。

「どうして受けなかったんだ？」

「そ、それは・・・」

ずーっと気絶してたからなんだよ
と言ったら、間違いなく恥をかく。
それだけは嫌だ。

なんか僕のプライドが許さない。

・・・まあプライドなんてもともと無いけど。

「・・・」

そんな僕を見ていた楓さんが。
軽いため息をつき。

「教えてやってもいいぞ」

そう言った。

「・・・え？」

ほ、本当に？

「いいの!？」

「別にかまわないぞ、どうせ暇だしな」

誰かさんのせいだな。と小さくつぶやいた。

多分だが、その『誰かさん』とは宗助の事だろ。
当の本人はのほほんとしている。

「では早速始めるとしよう」

そう言つて手を前に出した。

「いいか、私がするのをちゃんと見ておくんだぞ」

そして……。

「いでよ『ティアマト水神女帝』召喚!!」

そして出てきたのは……日本刀？

そう、薄い水色の日本刀……にしてはちょっと大きいな。
大きさでいえば、野太刀の部類だろう。

「これが私の魔道具。水神女帝だ」

そう言つて僕の方を見て。

「翔。その魔道具の名前は？」

またよく分からない事を言われた。

「え？名前？」

「そうだ名前だ。魔道具は物だが唯の物ではない。その存在を示す
名があるんだ」

「へー、そうなんだ」

「名前が分からないのか？まあ、お前の魔道具はまだ覚醒もしていないよだしな」

「覚醒？」

「なんじゃそりゃ？」

「覚醒と言うのは、名前を読んで魔道具を起こす事だ」

「為るほど……つまり。」

「僕の魔道具はまだ睡眠状態ってこと？」

「まあ、簡単に言うとそう言う事だ」

「勉強になるな……ん？」

「という事は、伊織やリンはもう覚醒を済ませてるって事になるよな？
……げ！？じゃあ僕だけやってないんだ！！
軽く落ち込むな……」

「ん？どうした？」

「いえ、ちょっとした内密事情みたいな物ですから気にしないでください」

「「は？」」

二人そろって訳がわからないと言った感じだった。

「まあよく分からんが・・・再開していいか？」

「あ、いいですよ」

気を取り直してやる事に。

「まずは自分の魔道具の名前を知るために、聞く事が大事だ」

聞く事？

どうやって？

「まずは自分の魔道具を持て」

言われるがままにそうした。

・・・結果。

「お、おもい！？」

相変わらず重かった。

「それはそうだよ」

宗助が苦笑しながら。

「まだ魔道具は覚醒してないからね。そのぶん重いんだよ」

「まあ、覚醒したら少しは軽くなるだろ」

ほ、本当にか？

嘘を言うんじゃないぞ！

ってか嘘だったら泣いてやるぞ！！

「阿呆か」

軽くあしらわれた。

「まずは集中しろ、そして魔道具に意識をあわせるような感じでいけ」

「わ、わかった」

まずは集中だ。

・・・・・・。

神経を研ぎ澄まして・・・・意識を魔道具に・・・・。

すると突然、魔道具が光りだした。

「・・・・・・すごいな」

関心しながら宗助が楓に聞いた。

「あんな曖昧な説明でこれだけ出来るって・・・・・・もしかして翔って天才なの？」

「天才・・・・いや才能じゃないか？潜在能力が高いとか？」

少し考えながら楓がそう答えた。

「そうかもね」

そんな風に二人が会話をしている間、翔はずっと魔道具に集中していた。

『おい、魔道具きこえるか？』

・・・。

『おい、返事をしろ』

・・・。

『あのーすいません。返事をしてください』

・・・。

『お願いします。答えてください』

・・・。

『・・・もうなんだかだるくなったな』

・・・おい。

『さっさと帰ろっかな』

おい、返事しろ。

『おわ！？なんだ一体？』

何だとは失礼なやつだな。お前が俺を呼んだんだろうが。

『って事はお前が魔道具の……なんだっただけ？』

化身だろ化身。

『そう、それだ！』

まったく、人様が寝ているのに起こしやがって、お前何様だ？

『あるじ様だよ』

阿呆か？それとも馬鹿か？

『お前失礼なやつだな』

何とでも言え。

『それよりも、もう起きろ』

なにがだ？

『さっさと覚醒してくれって言ってるんだよ』

為るほど……だからここまで来たのか。

『そうだよ。まったく、ずっと寝てやがって……お前かなり重

たいんだぞ』

何言ってやがる。俺は最初は起きてたぞ。

『……え？』

なのお前は俺を作った瞬間に寝やがって……お前こそ何様だよ。

『そ、それはすまなかった。僕が悪かったよ』

ふん。分かればいいんだよ。

『所で早く起きてくんね？お前かなり重くて、腕がもげちまいそう
だ』

そつか？俺はまだ眠っていたいいんだが……

『そこを何とかしろ、僕の魔道具だろうが』

分かった。分かった。起きてやるよ。

『じゃあさつさと名前を言ってくれ』

大事な事だからな、ちゃんと覚えろよ。

『分かった』

じゃあいくぜ！俺の名前は……

そして意識が現実に戻った。

「こい『ランスロット暴龍騎士』!!!」

その瞬間、魔道具が輝いた。

第十二話 魔道具覚醒（後書き）

あとがき劇場＊ 僕龍貴姫編

や、どうも、作者の伊藤です。

翔「どうも」

それにしても・・・今回は長くなったな。

翔「長い割には、話が進んでいないがな」

うぐ！？い、痛いところを・・・

翔「ま、そんな訳で、読者の皆さん。気長に見てやってください」

自分からもよろしく願います。

翔「ここで僕らの魔道具の意味を少し説明したいと思います」

ネタばれもありますけど、参考にはなると思うよ。

＊魔道具＊

名前説明。

＊ワイアーム地竜槍＊

ワイアームというのはワームの事で、よくゲームなどに出てくる地竜のことです。ドラゴンの中でも古い竜、生命力が高く、または手足や翼を持たないものを指します。まあ簡単に言えば、古くから伝わる伝統のドラゴンです。だから宗助君の魔道具は、名前の地竜槍がそのままドラゴンの意味を指します。

ティアマトー
* 水神女帝 *

これも名前の通り、女神です。ただし唯の女神ではありません。バビロニア神話で初めて登場した女神です。ティアマトーは人間が住む世界が完成する以前に、子孫である神々と戦った。そして戦った結果、負けてしまい、その亡骸がが人の世界となったのです。

天空、大地、星、これらは全てティアマトーだったのです。英雄に滅ぼされし原初の女神。それが楓さんの魔道具です。

ランスロット
* 暴龍騎士 *

これは有名な名前で読者も知っていると思います。ランスロット。『コードギアス 反逆のルル・シュ』のスザク君が乗っているナイトメアの名前でもあります。この意味はアーサー王物語の円卓の騎士の一人です。王妃グニエールの恋人となり、その罪により聖杯探索に失敗。また理想の騎士として描かれている。

これは意味どうり、この話でそうなっていく可能性がある事を示しています。暴龍騎士の暴龍は彼、翔君のもう一つの姿の意味でもあります。大切なものを守ると言う意味での騎士と言う意味でもあります。因みに、コードギアスでは、文字通りの意味で、ランスロットに乗っている、スザク（騎士）がユーフィミア（王妃）の恋人となり、

コーフィミア（王妃）を守れなかったため、自分の大切な者を失った。まさにランスロットの名をそのまま背負っている。
（これは一部偏見になるかもしれないのであしからず）

以上が、今回の説明（解説）です。

多分間違いはないと・・・思います。

もし間違っていたらすみません。

なんせ覚えている範囲だけ書いていますからね。

第十三話 とりあえず終わり？（前書き）

遅くなつてしまい、すみません。

あと今回の話はかなり短めです。

直ぐに書いていきますので見捨てないでください。

第十三話 とりあえず終わり？

精霊は歌う。

大いなる力。

全ての万物を司らん。

その命。

その魂。

そしてその屍でさえも。

その力、守るべき者の為。

しかし。

その力は。

罪でもあり。

罰でもある。

それでも力を願うのならば。

唱えてみよ。

我の名は、暴龍騎士。
ランスロット

共に戦う者なり。

その声が頭に響いたと思ったら、急に光が弱くなった。
そして完全に光が消えた時。

覚醒した魔道具が姿をあらわした。

「これが僕の魔道具『暴龍騎士』」
ランスロット

綺麗な赤に、鮮やかな模様の黒。
形状は見た感じ大剣？（大太刀らしい）
全長2mといった所だろう。

覚醒する前とは大分違った形になっていた。

「どうやら、上手くいったみたいだな」

僕の魔道具を見ながら頷く楓さん。

「では次の段階に……」

と何かを言いかけていた所で。

【キーン。コーン。カーン。コーン】

学校のチャイムがタイミングよく鳴った。

「むっ、もう時間か」

どうやら結構時間がかかったみたいだ。
そのチャームが鳴り終わったのと同時に、目の前の建物から沢山の人が出てきた。

「時間になったことだし、僕らも移動しようか？」

それまで黙っていた宗助が口を開いた。

「そうだな、とりあえず覚醒は済ませたことだし」

「そうだね・・・って」

僕も同じように同意しようと思ったが、ここで問題が発生した。

僕って一体何組なんだ？

「ん？どうかしたのか？」

僕の変な様子に楓さんが聞いていた。

「い、いや、僕って何組なんだろうって思ってたさ」

そんな僕の悩みに宗助が一言。

「それなら大丈夫だよ」

「え？なんで？」

クラスが分らないと移動のしようがないだろ。

「まあ、とりあえず移動すればわかるよ」

暢気に言う宗助。

「確かにな」

同じく、平然としている楓さん。

「・・・・・・」

そんな二人をよそに僕は心配だった。

第十三話 とりあえず終わり？（後書き）

あとがき劇場＊僕龍貴姫編

やあ読者の皆様方。伊藤です。

翔「今回もあんまり進んでいないし、話が短いな」

・・・ごめん。色々とあつて・・・書く時間が無くて・・・
それに前期講習が始まって・・・それに微妙に憂鬱気味で・・・

翔「まあ、色々とあつた訳か」

そう！！そうなんだよ！！

翔「だがそれはいい訳にすぎんだろ」

・・・そうだな。

翔「今度はもつと頑張れよ」

そうするわ。

翔「今回の説明は何かないのか？」

うん。次回はあるけど、今回はこれと言った事はないな。

翔「そうか」

あ、一つだけあったわ。

翔「なんだ？」

この小説を見ている皆様方。

感想、評価ありがとうございます。

皆様方の感想や評価を見て、元気づられて頑張っ
て書いています。
これも読者様のおかげです。

これからの感想や評価をどしどし
まっています（感想だけでもOK
です！！！！）ので、宜しく
願います。

第十四話 クラスの分け方

「あの……これは何ですか？」

二人に連れられて、ついた場所は変わった所だった。

「魔方陣？」

ついた場所には魔方陣があった。それもかなりの大きさ。

前に魔道具を申請しに行った時と同じ位の大きさだが、少し変わった形をしていた。

その魔方陣は『円形』ではなく『六角形』だからだ。

「この魔方陣は……まあ、乗れば分かる」

説明よりも実際にやった方が早いと判断して、楓さんがその魔方陣の中に入っていた。

「ちゃんと見ておくんだぞ」

そう言つて、一言。

「ジャンプ
跳躍」

そう唱えた。

その瞬間。

楓さんの姿が消えた。

「え！ど、何処に行つたの？」

僕が不思議に思っていたら。

「自分のクラスに行っただよ」

宗助がよく分からない事を言った。

「自分のクラス？」

どう言うことだ？

「この魔方陣は『クラス分け』の役目があるんだよ」

クラス分けの役目？

何だそりゃ？

「簡単に説明すると、この魔方陣の上で呪文を唱えたら、自分のクラスに行けるんだよ」

「………為るほど」

とどのつまり、この魔方陣の上に乗れば自分のクラスに行けるって事だな。

なかなか便利なものだ。

「でも欠点があって『つくまで自分のクラスが分からない』ってことなんだよね」

確かにそれも一理あるな。

この方法だと、友達と同じクラスになれるかが分からないからな。

「まあこの方法は、学校の伝統みたいなものだからね」

「やっぱり、どの学校にも伝統はあるんだな」

「……伝統があるのは学校だけとは限らないけどね」

宗助が苦笑しながら言った。

「それよりも、早く行かないとまずいんじゃない？」

「え？なんで？」

「楓が痺れを切らしてこっちに来るかもしれないから」

・ ・ ・ ・ ・ 楓さんって、
 どんだけ短気なんだ？

そう思いながらも、僕と宗助は魔方阵の中に入って。

「
「
跳躍ジャンプ
」
」

二人同時に唱えた。

そして付いた先には・・・。

「俺の歌をきけええええ！！！」

見慣れた馬鹿（志穂さん）が居ました。
しかもはた迷惑な事に歌を歌っている。

「むっ？」

その馬鹿はこちらを見て。

「……あれ？なんで翔がここに居るんだ？」

今頃気付いたのかよ。

しかもかなり驚いているし。

「おかしいな……呪文を間違えたか？」

何か一人でぶつぶつ言い出した志穂さん。

そんな時だった。

「もしかして……翔？」

「ん？」

誰かが僕を呼んだ気がして、後ろを振り向いたら。

「え！？」

そこにいた人物はリンであった。

第十四話 クラスの分け方（後書き）

あとがき劇場＊僕龍貴姫編

・・・予定通りにはいかないものだな。

翔「世の中そんなもんさ」

話しの構造はある程度できてるけど、自分の文章力が貧弱すぎて、追いつかんわ。

翔「まあ頑張れとしかいい用が無いな」

検討はする。

翔「どうでもいいけど、今回はまた微妙なところで終わったな」

まあ、気にするな。

翔「逆に気になるわ」

そんな事はさて置き、感想と評価をしてくれる読者の皆様方、いつもありがとうございます。

読者数が一万を突破したのも読者の皆様のおかげです。これからも宜しく願います。

第十五話 始まる学園生活（前書き）

遅くなつてすいません（汗）

もう少し早く書き上げたいと思います!!

なので、これからも応援、宜しくお願いします!!

第十五話 始まる学園生活

よくよく考えてみればありえない話ではなかった。

なんせ彼女も今年から学校にはいるといっていたし、僕が知らなかっただけで、同じ学校に入学する事だっただけの話だ。

まあ、そんな訳で・・・

「どうして言ってくれなかったの？」

なぜか怒られてます。

・・・なんでだ？

「いや、僕だって同じ学校とは思ってなかったんだよ」

それに、僕はこの学校の名前すら知らなかったし。

「ふーん・・・そんな事言っただ」

どういった訳か、ご機嫌斜めのご様子です。

さて、どうするべきかね。

そんな悩んでいる時、誰かが僕の肩を叩いた。

「ん？」

振り向いて見たら。

「やあ、翔」

「どうもだ」

宗助と楓さんだった。

「二人ともなんでここに？」

「同じクラスだから」

「それ以外に理由があるか？」

「まあ、理由は無いけど……ん？」

後ろの方から妙な視線を……
振り向いて見ると

「……………」

視線の人物はリンと伊織だった。

……………いつの間に伊織が？

あとリン。さつきより不機嫌になっていないか？

「翔君……………」

「ねえ、その人たち誰？」

微妙に二人の痛い視線を（僕に向けて）受けつつ、素直に答える。

「さつき知り合っただけの……………」

「僕は翔の友達だよ」

「私も似たようなものだ」

いつの間にか友達にランクアップしている。

「そ、そうなんだ・・・」

「ふーん・・・」

納得したような、してないような表情で、宗助と楓さんを見ている。
・・・どつちかと言うと、楓さんの方をジーっと見ている。

まあ、同姓でも綺麗な人だと思うからな。けど、そんなジロジロ見るのはどうかと思うぞ。

「カッコいい・・・」

「・・・綺麗な人達だね」

「そうだな」

「・・・」

なんでそんな目で僕を見るんだ？

僕は素直に答えただけだぞ。

「翔君って、ああいった子が好みなの？」

いきなり何を言い出すんだリンよ。

「僕はそんな意味で言ったんじゃないよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かってるよ」

「いや。絶対分かってないだろ」

最初の間は何だよ。

明らかに疑ってるだろ。

「はいはい三人とも、ここは一応教室だから、痴話喧嘩は後でね」

「そうだぞ。ったく、見ているこっちが恥ずかしい」

宗助と楓さんの言った言葉に、リンと伊織が反応して赤くなった。それと同時に周りの人達もこちらに注目する。

「あ、あう・・・・・・・・」

「うう・・・・・・・・」

周りの視線にさらに赤くなる二人。

「僕は分かっているけど・・・・・・・・」

「そう？ならいいけどね」

ニヤニヤしながら言う宗助。

そんなニヤついた顔で笑うな。

「努力はするよ」(ニヤニヤ)

「……明らかに努力する気は無いみたいだ。」

「はいはい！！諸君ら、席に着け」

先ほどまで歌を歌っていた馬鹿（志穂さん）が教師らしく皆に言う。
「……教師？」

「あの志穂さん」

「ここでは先生だぞ、翔君」

先生って事は。

「……マジで先生？」

「本気と書いてマジだ。ついでに言うならば、真剣と書いてマジとも言うぞ」

だれもそんな事まで聞いとらんわ。
それにしても志穂さんが教師か……

「世も末だな」

「翔君は相変わらず失礼だな」

微妙に引きつった表情をしながら。

「これから一年間。このクラスの担任になった、宝条志穂だ。宜し
くな！」

この先、色々と心配なことがありそうだけど、どうにかなるかね？
かくして学園での生活は、一応無事に始まったという事だ。

第十五話 始まる学園生活（後書き）

あとがき劇場＊僕龍貴姫編

やっこのこさで更新だ。

翔「遅いわ馬鹿者」

うう・・・だってさ、モンハンP2Gをしてたら遅くなったんだもん。

翔「いい訳は無しだ」

すいませんでした。

翔「つたく、程ほどにしておけよ」

努力はする。

翔「んで？これからこの話はどうなるの？」

んゝまあ、少しずつって訳では無いけど、結構、面白く、おかしく、時々真面目について感じかな？

翔「まあ頑張れや」

おう、あ、読者の皆様方。
いつも応援ありがとうございます。

僕自身まだまだ未熟ではありますが、これからも応援宜しく願います。

翔「なんか、かなり真面目だな」

まあな、サボっていた分これからは頑張るからな。

翔「そうか」

あ、あと次回のあとがき劇場はリン、伊織、志穂さんの魔道具の解説をしたいと思います。

見たい人は、今度のあとがきを期待しててください。
それではまた次の話で」

第十六話 傍から見れば何とやら？（前書き）

えーっと、いい訳はあとがきでって事で・・・

第十六話 傍から見れば何とやら？

入学式から次の日。

現在。担任の授業…とは言うが殆どやる事が無い。

まあ正確に言えば、担任の先生（志穂）が昨日調子に乗ってお酒を飲みすぎて、二日酔いでダウンしている。そのため全然やる気が無いらしい。

一応簡単な自己紹介を一通りしたが、一向に動く気配が無い。もう今日の授業は諦めた方がいいだろうと思っていた矢先に、志穂さんが重大発言をした。

「……新人生諸君。これから君達の技量を測るために模擬戦をする事になっている」

志穂さんが気分悪そうに言った。

当然だが、今の言葉にクラス全体がざわめく。

「模擬戦ってなんだ？」

「模擬戦って何をすればいいんだ？」

「対人戦みたいなものか？」

「俺らの実力でも見るんじゃない？」

「じゃあテストなのか？」

と色々な所から模擬戦について話が聞こえる。

簡単に聞いた話を纏めると、実力を知るためにクラス内での模擬戦闘をするという事か。

「ええい！！うるさい！頭に響くだろうが！！……オエッ」

あまりにもうるさかったので、バン！！バン！！と教壇を叩き、生徒を静める。

つてかあんた本当に大丈夫か？最後は吐きそうだったぞ。そして周りが静かになるのを確認してから説明を続けた。

「お前らが言うとおりだ。これはあくまで技量を測るだけであって、成績とかには響かないから安心しろ」

そう言われると余計に安心できないなだろ。

と思うが口には出さない。

何故なら……

「うつ！なんか色々リバースしそうな感じで……オエッ！」

とかなりピンチ状態に陥っている。

だから昨日は止めとけて言ったのに。

「…皆さんは先に第一ドームへ行ってください。先生はちょっと保健室に寄ってから行きます」

フラフラでかなりだめオーラを出しながら先に出て行った。これから先がかなり心配になったのは言うまでも無い。

「そんな訳で場所は変わってドームへ」

ドームと言うのは僕の居た次代で言う体育館みたいなものだ。場所は3種類在って、それぞれの学年によって場所は決まっているらしい。

ドームはよく模擬戦や演習訓練に使われる場所で、ある程度の攻撃じゃヒビ一つつかない。

そのため召喚魔法もここで行われるらしい。

まあ聞いた話だから、本当はどうだかしらんが。

「おい。みんな集まってるか？」

僕らが到着してから2、3分後に、志穂さんが到着した。

「多分そろっていますよー」

周囲を見ながら宗助が答える。

なんかクラスの代表のような感じだな。

「なら初めてもいいか」

一応生徒が全員いるかを確認しながら、説明を始める。

「これから二人組みのパートナーをつくってください。説明はそれからしまゝす」

パートナーか、僕は誰と組もつかない。

「翔君！」

「伊織か、どうかしたか？」

「あ、う、その…」

もじもじと顔を赤くしながら何かを言おうとする伊織。

「パ、パートナーを私と「あ、翔！」……………へっ？」

伊織が何かを喋っていたときに隣から声が割り込んできた。

「リンか」

「おゝいえす」

ニヤニヤしながらこちらに近づいて来て。

「ねえ、私と一緒にくま「ダメです！」……………あい？」

今度は伊織がリンの言葉をさえぎった。

「むっ、邪魔しないでよ！」

「それはこっちの台詞です！」

二人の間でバチバチと火花が散る。

「三人ともまだのようだね」

「お前達はまだ決めていないのか？」

僕らの様子を見に来た宗助と楓さん。

「あ、二人とも決まったの？」

「僕は楓と組む事にしたよ」

「まあ不本意だな」

ふーん。でもそのわりには…

【ザシュ！！】

「…今、変なことを考えていなかったか？」

「い、いえ、別に」

あぶなっ！？

いきなり水神女帝をのど元に突きつけてきやがったぞ！？
ティアマート

「おまえが変なことを考えているから悪いんだ」

どんな理屈だよ。

「それより早く決めないと選ぶ人が限られてくるよー」

「そうだぞ」

「分かってるよ」

確かに早くしないとパートナーが見つからないな。
…それにしても。

「伊織はいつも一緒にいるじゃない！こういう時は私に譲ってよ！」

「ダメです！私にだった譲れないものはあります！」

あっちはまだやってるのか。

「はあー仲が良いんだか悪いんだか」

そんな二人を見た宗助は。

「翔つてもてるんだねー」

と勘違いをしていた。

「私もそう思うぞ」

同じように勘違いをしている楓さん。

「二人とも節穴だな」

僕がもてるわけ無いだろ。

「それはお前の事だろ」

「だねー」

何故か二人に呆れた顔で見られていた。

第十六話 傍から見れば何とやら？（後書き）

あとがき劇場＊僕龍貴姫編

やあ皆さん！元気にしていましたか？伊藤です。

翔「伊藤。今回はかなり遅くなっただな」

うつ！？そ、それには色々と言が……

翔「へーってどんな訳だよ」

夏ばてです。

翔「理由になつたらん」

実は、前回僕がこのあとがきで他の人達の魔道具の説明をするって
言ってたじゃん。

翔「あ、言ってたな」

それで実はこの次の話で、そのかたがたの魔道具が出てくるから
それにあわせて二話同時だしをしようと思ってたんだよねー

翔「それで」

結局間に合わず、時間がこんなにたってたって訳だ。

翔「………シヨボ」

うつ！？い、痛い所を………

翔「それじゃあ今回する予定だった説明は？」

次回って事で。

翔「ほんとダメな作者ですいません」

まあ、夏休みにもうすこしたら入るから、それまでは待っていてください。ってか、いつもまっっている方々本当にすいません。

第十七話 結局こうなるってオチか

結局、僕は余っていたクラスメイトと組むことになった。

えっ？あの二人？ああ、あの二人は……

「私ね、なんかこんなオチになると思ってたんだよね……」

「……うん、私もそう思う……」

二人とも落ち込みぎみであった。

こうなったのは志穂さんに『喧嘩するならお前ら同士組め！！』って言われて二人が組むことになったからだ。

まあ仲はいいから大丈夫だと思うし、自業自得？だと思うから同情はしなぞ。

「さてさて、みんなパートナーが決まった事だし、説明をするからよく聞いておくように！！」

でかい声で皆に聞こえるように説明し始めた。

「制限時間はなし。パートナーと一緒に相手を倒せばOK！以上説明終わり！」

えらく簡単な説明だったな。

「あ、因みに、相手が降参や戦闘不能。またはそれに準じる状態に陥った場合はこちらで判断して試合を中断させるから、そこんこよろしくね」

重要なところを簡単なノリで話すなよ。

「じゃあまずは……雪村宗助& a m p・柳嵯楓ペアから行ってみようか」

どういったらそんな順番になったんだ？

「あの先生」

「なんだい？柳嵯さん」

「普通は名前順とかでは？」

そんな質問に志穂さんはふっふと笑いながら

「そこら辺はノリよ！！」

とまあ簡潔に述べてくれた。

この人、本当に人生を謳歌してるよな！。

「まあ実を言うと、あんた達はこの学年の主席と次席だから、どれくらいの力があるか知りたかったって言うのが理由かなー」

「え！？宗助ってそんなに優秀なの！？」

楓さんとはかく宗助がそうだななんて以外だ。

「まあね」

「むかつく事だが、私が次席でこいつは主席だぞ」

「世の中ってほんと不思議だね……」

志穂さんの教師の事といい、宗助の主席の事といい……世の中って一体どういった仕組みなんだ？

「そんな些細な疑問は後にして、二人とも準備しな」

「はい」

「分かりました」

そう言つて二人はドームの真ん中に行く。

「じゃあ相手は……」

この二人の相手って言つたのだからよっぽど強い奴なんだろうな――

「翔――！」

……は？

「なにが？」

「いやだから、あいつらの相手は翔とそのパートナーだ」

……え？

「……それってなんの冗談？」

「なわけ無いだろ」

「ですよー」

つてええええええええええ！！！！

「おかしいでしょ！？どう考えたってありえないだろ！？」

「うるさいなー別に私が決めたんじゃないわよ」

「じゃあどうやって決めたんだよ」

「あみだくじで」

こいつ殴ってもいいですか？

「まあ、ほら、運がよかつたら勝てるはず」

なんだよその投げやりな言い方。

「為るほど、翔が相手か！」

「無論。手加減はしないぞ」

「そこはしてほしいな」

「じゃあ準備が終わりしだいはいじめるからな」

どう考えてもこれの戦いは避けられないってことか。

僕、
帰ってもいいかな？

第十七話 結局こうなるってオチか（後書き）

あとがき劇場・僕龍貴姫編

作者「何故だろう、書いていくうちに予定と少し違った感じになっちゃった」

翔「本当は僕からの戦闘じゃないはずだろ」

作者「まあ、細かいことは気にしない」

翔「気にするわ。どう考えたってあの二人に勝てるわけないだろ」

作者「どうせ余興だし、かませイヌにでもなってきな」

翔「最悪だ！ここに最悪な奴がいる！！」

作者「そんな訳で、次回、翔君が頑張って戦います」

翔「それを書くのは伊藤の仕事だな」

作者「はっはっはー出来るだけ頑張るわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083c/>

僕は龍であなたは姫様？

2010年11月12日22時19分発行